The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1 (Gonāmika章冒頭) の研究
Author(s)	天野, 恭子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2010, 44, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5022
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1（Gonāmika章冒頭）の研究

天　野　恭　子

1.　古代インドの祭式・儀礼をめぐって、儀礼の実際のやり方、それに対する議論、その裏付けとなる思想、理論あるいは古くから伝承されてきた神話等が、織り交ぜて述べられているのがBrāhmaṇa散文と呼ばれる文献群である。その中でも最古のものとされるMaitrāyaṇī Saṁhitā（以下MS）は、B.C. 900年頃の成立と言われ、祭式、思想、言語の研究にとって重要な資料である。MS IV 2は、Gonāmikaという儀礼を扱う章であるが、現在まで、訳やこの章の内容に触れた研究はほとんどされていない。また、この章には伝承に問題のある箇所や、特徴的な語彙も多い。本稿ではIV 2の冒頭を訳出し解説を加え、この章の特徴や重要な言語的現象を示したい。

2.1.　Gonāmika「雌牛の名前に関する［儀礼］」[1] については、そもそも祭式文献における記述がほとんどない。Brāhmaṇa散文ではMSのみ、後代の祭式解釈文献でも、MSに属するMānava-Śrautasūtra（以下MŚS）のみに記述があり、同じくMSの流れを汲むVārāha派ではPariśiṣṭa（補遺）に記述が見られる[2]。GonāmikaはVeda祭式の中心をなすŚrauta祭式の一つではないことから、祭式文献で扱われることが少なかったと考えられるが、その意味では、MSに記述があることが極めて異例であると言える。

2.2.　少ない資料からGonāmikaの儀礼全体を概観することは難しいが、MŚS冒頭の数節に重要な規定が現れ、その非Śrauta的性格が見て取れる。

MŚS IX 5,5,1 *cāturhotṛkagonāmikam apy anāhitāgner dvādaśarātraṃ trirātram ekarātraṁ vā.*「Caturhotṛの文言を用いる、Gonāmika［なる儀礼］は、祭火を設置していない（祭主としての資格のない）者によっても、12晩の間、3晩の間、あるいは1晩［行われる］。」

IX 5,5,2 *pākayajñopacārād agnim upacarati.*「調理祭の手順で、火を扱う。」

IX 5,5,3 *sāṃgrāmikī jayasya dakṣiṇā. saptasthavīryeṣu vāso deyaṁ, hiraṇyaṁ vā deyam.*「勝利の際には、戦いで得た物が布施である。Saptasthavīrya［儀礼］の際には、衣服が与えられるべきである。あるいは金が与えられるべきである。」

IX 5,5,4 *revatyāṃ citrāyāṁ vā paśukāmaḥ karma kurvīta.*「Revatī［星宿］あるいはCitrā［星宿］の日に、家畜を望む者は［この祭式］行為を行うべきである。」[3)]

3. 和訳と解説

MS IV 2,1(1):20,13-21,11

(20,13-21,4) *prajā́patir vā́ eká āsīt. sò 'kāmayata: "bahúḥ syāṃ, prájāyeya=" íti. sá mánasātmā́nam adhyāyat. sò 'ntárvāṇ abhavat. sá vijā́yamāno gárbheṇātāmyat. sá tāntáḥ kr̥ṣṇáḥ śyāvò 'bhavat. tásmāt tāntáḥ kr̥ṣṇáḥ śyāvá iva bhavati. tásya vā́ ásur evā́jīvat. ténā́sunā́surān asr̥jata. tád ásurāṇām asuratvā́ṁ. sá yás tád ásurāṇām asuratvā́ṁ véda=, ásumān ha bhávati, náinam ásur jahāti.*

「Prajāpatiは一人だった。そこで『たくさんになりたい。繁殖したい。』と願った。そして、考えて、自分自身を想った。すると彼は妊娠した。彼は胎児を出産する際に[4)]、息をつめた。そして、息をつめて青黒くなった。それ故に［人は］、息をつめると幾分青黒くなる。その

時彼の命だけが生きていた。その命（*ásu-*）によってAsura達を［生み］出した。だからAsura達は*ásura-*と呼ばれる。だからAsura達は*ásura-*と呼ばれると知る、そういう者、彼には命が備わり、命が彼から無くなってしまうことはない。」

(21,4-6) *só ’surān sr̥ṣṭvā́ pitévāmanyata. téna pitŕ̥n asr̥jata. tát pitr̥̄ṇā́ṃ pitr̥tvā́ṁ. sá yás tát pitr̥̄ṇā́ṃ pitr̥tvā́ṁ véda, pitéva ha samānā́nāṃ bhávati, yánty asya pitáro hávaṃ.*
「彼はAsura達を［生み］出した後、父親（*pitár-*）の気分になった。そのことから祖霊達（*pitáras*）を［生み］出した。だから祖霊達は*pitár-*と呼ばれる。だから祖霊達は*pitár-*と呼ばれると知る、そういう者、彼は同輩達の中で父親的［存在］となり、彼の父祖達は彼の呼びかけに［応えて］やって来る。

(21,6-8) *tásmai pitŕ̥nt sasr̥jānā́ya dívābhavat. téna devā́n asr̥jata. tád devā́nāṃ devatvā́ṁ. sá yás tád devā́nāṃ devatvā́ṁ véda, dívā ha vā́ asmai devatrā́ bhávati, yánty asya devā́ deváhūtiṁ.*
「祖霊達を［生み］出した彼に、昼が（*dívā*）訪れた。そのことから神々（*devā́s*）を［生み］出した。だから神々は*devá-*と呼ばれる。だから神々は*devá-*と呼ばれると知る、そういう者、彼には神々の許［へ行く際］に昼が訪れ、神々は彼が神を呼ぶ際には［それに応えて］やって来る。」

(21,8-11) *sá devā́nt sr̥ṣṭvā́manasyateva. téna manuṣyā̀n asr̥jata. tán manuṣyā̀ṇāṃ manuṣyatvā́ṁ. sá yás tán manuṣyā̀ṇāṃ manuṣyatvā́ṁ véda, mánasvān ha bhávati, náinaṃ máno jahāty. utá yád átīva vádaty áti vā cárati, tíṣṭhante ’sya manuṣyā̀ ⁺mānuṣé.*

「彼は、神々を［生み］出した後、何だか考え込んでしまった（*amanas-yata*）。そのことから、人類（*manuṣyàs*）を創出した。だから人類は*manuṣyà-*と呼ばれる。だから人類は*manuṣyà-*と呼ばれると知る、そういう者、彼には思考が備わり、思考が彼から無くなってしまうことはない。彼の言葉や行動が、多少行き過ぎた時でも、彼の［周りの］人達は、［彼の］人あしらいで[5] 止められる。」

Prajāpatiによる創造神話にはいろいろなヴァリエーションが知られているが、その創造行為は大抵*sarj*「創出する」という動詞によって表わされる。ここでは「創出する」という動詞に並んで、*antárvān bhav*[i]「妊娠する」、*ví-jāyate*「出産する」という表現が現れる。男性原理であるPrajāpatiの「妊娠、出産」が語られる、珍しいヴァリエーションである。MS IV 2,13:36,3では、神々の妊娠が語られるが、これはこの箇所の主語を入れ替えた、焼き直しであろう。

:21,8 *devatrā́*「神々の許で」のこの章での例は、重要である。すなわちここで、「神々の許で昼となる」というのは、彼が死んで神々の許へ行く時のことが意図されているのである。この文の理解のため、祭主の死後、火葬する時のことを述べた、次の箇所が参考になる：

MS I 8,6(3):124,7ff. *gṛhṇīyā́n náktam agním. asuryà vái rā́trir. jyótiṣaivá támas tarati. dívā ha vā́ asmā asmíṃl loké bhavati, prā́smā asáu lokó bhāti, yá evā́ṁ véda.*

「夜に［火葬のための］火を取り寄せるべきである。夜はAsura達に属するのだ。［死んだ祭主は］光によって闇を渡ることになる。このことを知るならば、その者に、この世界で昼が訪れ（その者にとって

この世界が明るくなり）、あちらの世界が彼に［向って］輝き出す。」

つまり、死後、火葬の際に、死者が過たず天界に行けるよう、死者のいる場所と行先が光で照らされることが重要と考えられていたことがわかる。さらに下のIV 2,1(4)において、「死後に、神々の視力で見る」「神々の通り道がわかる」ことが述べられているが、同様のことが意図されていると考えられる。

この章に繰り返し現れる、*sá yás ... véda*の構文も、特筆すべきである。この*sá*は、ここでは、この代名詞の本来の機能を持たない。つまり、前に述べられているものを受けているのではない。また、:21,8 *sá yás ... véda, ... asmai*の文では、主文に、関係文を受ける代名詞Dativ Singular *asmai*が現れ、そこからわかるように、*sá*は主文の主語ではない（さらに :21,4.10 *sá yás ... véda, ...enam*, :21,6.8 *sá yás ... véda, ...asya*）。そのことから、*sá*は、関係詞*yás*と同格に置かれる、いわば「仮の先行詞」であると考えられる。このような構文はDelbrück, *Atlindische Syntax* (1888), 565に報告され、例えばAitareya Brāhmaṇa I 1,10 *tad yad ghṛtaṃ, tat striyai payas*「溶かしバターであるそれ、それは女性の乳である」が引用される。Brāhmaṇaの新しい層では珍しくないこの構文は、Brāhmaṇaの古層ではほとんど例がないと思われ、少なくともMSの中でも古いI、II巻には、一例も見られない。IV 2章が、MSの中で新しい言語的特徴を示す、一つの例であると考えられる。

IV 2,1(2):21,11-19

táto yā́ yónir udáśiṣyata, sā́ gáur abhavad. yónir vái nā́maiṣā́=. etád vā́ asyāḥ pratyákṣaṃ nā́ma=. átho āhuḥ: “parókṣam” íti. prá sahásraṃ paśū́n

āpnoti, yá evám̐ véda. tásyām̐ vái páyaḥ páryapaśyaṁs. tā́m̐ devā́ aduhra háritena pā́treṇāmṛ́taṃ. duhè 'mṛ́taṁ, yá evám̐ véda=. átha pitáro 'duhra rajaténa pā́treṇa svadhā́m̐. duhé svadhā́m̐, yá evám̐ véda=. átha manuṣyà̀ aduhra dārupātréṇā́nnaṁ +vavrí. duhé 'nnaṁ +vavrí, yá evám̐ véda=. áthā́surā aduhrāyaspātréṇa srávatā súrāṃ. tè 'sravant. srávaty asya bhrā́tṛvyo, yá evám̐ véda. tásmāt srávatā ná hástā ávanenijīta, ná pibed. eté vā́ asyā dóhāḥ. sárvair evā́syā dóhaiḥ sárvaiḥ kā́mair bhuṅkte, yá evám̐ véda.

「その［生み出した］後に残った母胎（*yóni-*）、それが雌牛になった。［だから］この例の（今、儀礼で用いる）［雌牛］が*yóni-*という名前［になった］のだ。この［名前］は、その（雌牛の）表向きの名前である。だが『裏の［名前］だ』という人達もいる。それを知っているなら、千頭の家畜を得る。その［雌牛］の乳を、（神々、祖霊達、人類、Asura達が）取り囲んで見ていた。神々はその［雌牛］を、金の器を持って［乳搾りし］、不死を搾り出した。それを知っているなら、不死を搾って得る。だが、祖霊達は、銀の器を持って［乳搾りし］、Svadhāを搾り出した。それを知っているなら、Svadhāを搾って得る。だが、人類は、木の器を持って［乳搾りし］、隠れた食糧[6]を搾り出した。それを知っているなら、隠れた食糧を搾って得る。だが、Asura達は、鉄の器を持って――［その器は］漏れていたのだが――［乳搾りし］、Surāを搾り出した。すると彼らは、消え失せてしまった。それを知っているなら、その者の競争相手は消え失せる。それ故に、漏れた［器］で手を洗ってはならない、［何かを］飲んでもいけない[7]。以上がその［雌牛］の乳搾りである。それを知っているなら、その乳搾りのすべて［のやり方］で、すべての願いについて、結果を得る。」

IV 2,1(3):21,19-22,13

catvā́ri vái nábhāṁsi: devā́ḥ pitáro manuṣyà ásurāḥ. sárveṣu ha vā́ etéṣv ámbho nábha iva bhavati, yá evā́ṁ véda. tā́ṁ vā́ akāmayanta: "máyi syān", "máyi syād" íti. tā́ṃ devā́ḥ "kā́mye //" íty ā́hvayant. sā́ vā́ enān abhyàkāmayata=. ubháye ha vā́ enaṃ devamanuṣyā́ abhíkāmayante, vā́rukā enam ā́rtvijye bhavanti, yá evā́ṁ véda. "// śrávye //" íti manuṣyā̀ḥ. sā́ vā́ enān aśuśrūṣata=. ubháye ha vā́ enaṃ devamanuṣyā́ḥ śuśrūṣante, pū́rvāsya janátām āyatáḥ kīrtír ā́gacchati, yá evā́ṁ véda. "// ílānde //" íti pitáras. tébhyo vā́ atiṣṭhata. tíṣṭhanty asmin paśávo, yá evā́ṁ véda=. átha yáthā́surā ā́hvayaṁs — tébhyo vā́ atrasad —, yáṃ dviṣyā́t, tásya táthā goṣṭhá +ā́hvayet. +trásanty asmāt paśáva. etáir evá juhuyāt (//) gonāmáiḥ saṁśṛ̥ṅgyā́ gór mūrdhán paśúkāmaḥ "// kā́myāyai svā́hā śrávyāyai svā́hélāndāyai svā́hā //" íti. goṣṭhó vái nā́maiṣā́ lakṣmī́ḥ. své vā́ etád goṣṭhé yájamāno bhrā́tṛvyasya paśū́n vṛ̥ṅkta. etáir vái té tā́ avṛ̥ñjata. táir eváinā vṛ̥ṅkte. saṁśṛ̥ṅgī́ bhavati; paśūnā́ṃ párigṛ̥hītyai.

「神々、祖霊達、人類、Asura達、というのは４つの雲なのだ。それを知っているなら、彼（祭主）はそれらすべての中で、水か雲のようになる。［神々、祖霊達、人類、Asura達は］、その［雌牛］を、『私の［仲間］になれ』『私の［仲間］になれ』と欲しがった。それを神々が、『望むに価する者よ（*kā́mye*）!』と呼んだ。するとその［雌牛］は、彼らに［仲間入りしたい］と望んだ（*abhyàkāmayata*）。それを知っているならば、その者を、神々と人類の両者が［仲間へと］望み、祭官［選び］では［いつも］彼を指名するようになる[8)]。人類は『名声ある者よ（*śrávye*）!』と［呼んだ］。するとその［雌牛］は彼らに従った（*aśuśrūṣata*）。それを知っているならば、神々と人類、両方ともが、その者に従い、［その者が］異境へやって来る時には、彼の名声が先

に届く。祖霊達は『滋養を与える者よ!』と［呼んだ］。すると彼ら［の側］へ、［その雌牛は］止まった。それを知っているならば、その者の許に家畜達は止まる。そして、Asura達が［雌牛を］呼んだように—［そう呼ばれて］、彼らを［雌牛は］恐れたのだ—、［祭主が］嫌いな、その人の牛小屋で、その［呼び方］で［雌牛を］呼ぶべきである。家畜達は彼を恐れる[9]。以上の雌牛の呼び名を伴って、家畜を望む者は、角が向い合せに生えた雌牛の額のところに献供するべきである、『望むに価する者にSvāhā! 名声ある者にSvāhā! 滋養を与える者にSvāhā!』と［呼びかけて］。これ（角が向い合わせに生えていること）が、『牛小屋』と呼ばれる特徴なのだ[10]。このようにして、祭主は自分の牛小屋へと競争相手の家畜達をもぎ取ってくるのだ。［上に述べた］この［呼び方］で、彼ら（神々、人類、祖霊達、Asura達）は当時［彼らの雌牛］をもぎ取ったのだ。そういう［呼び方だから］、それら（雌牛達）を［祭主は］もぎ取っていることになる。角が向い合せに生えている［雌牛］が用いられる。［そのことは］家畜達をぐるりと囲い込むことに［役立つ］。」

「４つの雲」に関する言明は、大変理解が難しい。同様の表現は、より古いSaṁhitāにも、Brāhmaṇa文献にも、一切見当たらない。唯一理解の助けとなるのは、Taittirīya-Brāhmaṇaの次の箇所である：

TB III 8,18,1-3 *ámbhāṁsi juhoti./ ayáṃ vái lokó ’mbhā́ṁsi./ ... yád ámbhāṁsi juhóti,/ imám evá lokám ávarundhe./ ... nábhāṁsi juhoti./ antárikṣaṃ vái nábhāṁsi./* (2) *... yán nábhāṁsi juhóti,/ antárikṣam evā́varundhe./ ... máhāṁsi juhoti./ asáu vái lokó máhāṁsi./ ... yán máhāṁsi juhóti,/ amúm evá lokám ávarundhe./*「水を献じる。この世界が水なの

だ。[...] 水を献じるならば、この世界を獲得する。[...] 雲を献じる。中空が雲なのだ。[...] 雲を献じるならば、中空を獲得する。[...] 広がりを献じる。かの世界が広がりなのだ。[...] 広がりを献じるならば、かの世界を獲得する。」

ここでは、水、雲、広がりが、それぞれ、地上、中空、天、に対応している。そのことから、水のそれぞれの場所での状態、つまり、中空では雲、天では（気化して）偏在している状態、を表しているものと考えられる。「雲において、水か雲のようなもの」というのは、構成要素であることを表現していると考えられる。

この言明の文脈との繋がりは、この「構成要素」ひいては「仲間」というテーマによってであろう。「それらすべての中で、水か雲のようになる」と、続く文の中の「私の［仲間］になれ」には、Lokativ と動詞 *as/bhav*[i] という、同じ構文が現れる（Delbrück, 117 を参照）。使用頻度の高い、所属や所有を表す Genetiv + *as/bhav*[i] の構文ではなく、ここで Lokativ が用いられることは、「構成要素 / 仲間」の意味合いが強いことを示している。

この節の内容は、儀礼の行為として MŚS IX 5,5,6-7 に規定されている。

IV 2,1(4):22,13-23,4

yó vái cákṣuṣo víbhaktiṁ véda, cákṣuṣmān ha bhávati, náinaṃ cákṣur jahāti. yád dívā páśyāmas, tád devā́nāṃ cákṣuṣā paśyāmo. ’sáu vā́ ādityó devā́nāṃ cákṣuḥ. páśyan ha vái devatrā́ karóti, prá devayā́naṃ pánthāṃ jānāti, yá evā́ṁ véda. yáj jyótsnāyāṃ páśyāmas, tát pitr̥ṇā́ṃ cákṣuṣā paśyāmaś. candrámā vái pitr̥ṇā́ṃ cákṣur. ná ha vā́ enam amúṣmiṃl loké cákṣur jahāti, prá pitr̥yā́ṇaṃ pánthāṃ jānāti, yá evā́ṁ véda. yát támisrāyāṃ páśyāmas, tán manuṣyā̀ṇāṃ cákṣuṣā paśyāma. etā́vad vā́vá

naḥ svám cákṣur. ná ha vā́ enam asmíṃl loké cákṣur jahāti, sárvam āyur eti, yá evā́ṁ véda. yád agnér ánte páśyāmas, tád ásurāṇāṃ cákṣuṣā paśyāmā. úc ca vā́ eṣá dī́pyate, ní ca riṣyati. dī́pyamānaṃ bhrā́tṛvyasya gṛhā́d dhared. rayím evā́sya púṣṭiṁ haraty. ā́ tú sū́ryasyódetor jāgṛyād. yát svapyā́d, ā́rtim ā́rchet. táj jāgaritavyàṁ. rayím evá púṣṭim ánujāgarti.

「視力の変化（色々な形をとること）を知る者には、視力が備わり、視力が彼から無くなってしまうことはない。日のもとで我々に見えているものは、神々の視力を使って見えているもの［なのだ］。かの太陽が神々の視力なのだ。それを知っているならば、［彼自身の祭式と布施の功徳を］見て（自分のものであると正しく認識して）、神々に示す、［また］、神々の通り道が［正しく］わかる。月明かりのもとで我々に見えているものは、祖霊達の視力を使って見えているもの［なのだ］。月が祖霊達の視力なのだ。それを知っているならば、あの世において、視力が彼から無くなってしまうことはなく、彼は祖霊達の通り道が［正しく］わかる。闇夜で我々に見えているものは、人間の視力を使って見えているもの［なのだ］。我々自身の視力というのは、実際その程度なのだ。そのことを知っているならば、この世において、視力が彼から無くなってしまうことはなく、彼は寿命を全うする。火の傍で我々に見えているものは、Asura達の視力を使って見えているもの［なのだ］。例の［神格］（Agni）は上へ燃え上がったり、下へ縮こまったりするのだ[11)]。燃え立っている［火］を、競争相手の家から運び出すべきである。彼の財産と繁栄を運び出していることになる。だが、［その後］、日の出までは起きていなければならない。寝てしまったら[12)]、事故が起こるかもしれない。だから、起きているべきである。財産と繁栄を［見守って］、起きていることになる。」

páśyan ha vái devatrā́ karóti の文が、難解であり、且つ大変重要な内容を示している。上のIV 2,1(1)に対する解説で述べたように、*devatrā́*「神々の下で」の語は、死後神々の下へ行く場面が背景として考えられていることがあり、ここでも、死後のことが語られている。そのことは、続く文の「神々の通り道」からもわかる（人間が死後に辿る「神々の道」と「祖霊達の道」については、Windisch, Ernst: *Buddha's Geburt* (1908), 58ff. を参照）。

devatrā́ + *kar* は、「神々の下に供する」「神々に示す」という術語であろう: Taittirīya-Saṁhitā I 7,1,6 *devatrā́* + *dattáṃ kar*「与えられたものを、神々の下に供する」（Keith, Arthur Berriedale: *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Sanhita* (1914) ad I 7,1,6: "he (may) place among the gods what is given"); TS V 1,7,4 ~ Kāṭhaka-Saṁhitā XIX 7:8,21f. この箇所での *kar* の目的語は、TS I 7,1,6を参考に、さしずめ「祭式と布施［の功徳］」と考えた。そのような概念を表す術語 *iṣṭā-pūrtá-* は、「［祭主が生前に行った］祭式と布施の効力ないし功徳」を意味し、祭主の死後、来世でのあり方を決定づけるものと考えられていた（阪本（後藤）純子:「iṣṭā-pūrtá-「祭式と布施の効力」と来世」、『インド思想と仏教文化』（1996), 67-87; Sakamoto-Gotō, Junko, "Das Jenseits und *iṣṭā-pūrtá-* "die Wirkung des Geopferten-und-Geschenkten" in der vedischen Religion", *Indoarisch, Iranisch und die Indogermanistik* (2000), 475-490）。また、*iṣṭā-pūrtá-* は祭主より先に天界に昇っているが、祭主が死後にやって来た際、自分自身の *iṣṭā-pūrtá-* を間違いなく受け取ることが重要視された。そこで、MS IV 2,1(4)の文における *páśyan*「見つつ」を、自身の *iṣṭā-pūrtá-* を、神々の視力によって、正しく見極めることを表していると解釈した。IV 2,1(1)で「死者にとって世界が明るくなり、過たず天界へ行く」と述べられることと、同様のモチーフが背景にあろう。

競争相手の家から火を取ってくる、という行為は、祭式行為としては異例であろうが、この文に倣ってMŚS IX 5,5,8でもそう規定されている。また、火を取ってきた後、「寝てしまったら事故が起こる」ため起きていなければならないとされる。MŚS IX 5,5,8では、*... āhṛtyendhāno rātrīṃ jāgṛyāt*「[燃え立った火を] 運び出した後、燃やしながら一晩中起きていなければならない」と述べられていることから、「火が消えてしまう」ことを避けなければならないと考えられていたようである。「事故」として考えられていたことの、さらなる可能性としては、「火が燃え広がってしまうこと」が考えられる。例えばMS I 8,9(5):129,17ff. *yásyā́hitāgneḥ sató 'gnír gṛhā́n dáhet*「祭火を設置した祭主でありながら、その者の祭火が家を焼いてしまった場合には」を参照。背景には、しかるべき鎮めを受けていない火は危険なものであるという認識がある（それゆえに、「祭火を設置した祭主でありながら（すなわち祭火に対してしかるべき儀礼を行い、火を鎮めているはずが)」とPartizip Präsensにより認容的に表現されている)。「鎮められていない火」については、MS I 6,5(3), I 6,7(4), I 8,5(5)などで述べられている。

4. MS IV 2,1の訳を試み、そのためにいくつもの語彙をBrāhmaṇa文献全体に亘り調査した。普通そのような過程で、該当箇所に対応するパラレルな記述が他の文献に見つかるはずであるが、MS IV 2,1に関してはそのようなパラレルが一切見つけられなかった。この章がMS独自の成立を持つこと、またこの儀礼がMaitrāyaṇī派だけで特殊に扱われていたことがわかる。また、その記述が思想的に重要な資料を含むことから、その成立事情は、重要性の低いものを単に後代に挿入した、というだけではないことが察せられる。MS IV 2章は、IV 2,1-14まであるが、全体を研究することによって、この儀礼、そしてこの章の、成立の背景を探ることが今後の課題

である。

注

* 本稿の元になった原典研究の際には、池田宣幸氏の意見が大変有益であった。ここに感謝の意を表する。

** Maitrāyaṇī Saṁhitāの原本のテキストには次の二つがある：Schroeder, Leopold von: *Maitrāyaṇī Saṁhitā. Die Saṁhitā der Maitrāyaṇī-Śākhā* (1881/1883/1885/1886); Sātavalekar, Ś. D.: *Yajurvedīya Maitrāyaṇī-Saṁhitā* (1988). 現在までに出版されているMS研究として、次の二つが挙げられる：Mittwede, Martin: *Textkritische Bemerkungen zur Maitrāyaṇī Saṁhitā* (1986); Amano, Kyoko: *Maitrāyaṇī Saṁhitā I-II. Übersetzung der Prosapartien mit Kommentar zur Lexik und Syntax der älteren vedischen Prosa* (2009).

1）MS IV 2,1(3):22,9, IV 2,10:34,3に現れる*gonāmá-*「雌牛の名前」の語から付けられた名前である。

2）Mānava-Śrautasūtraでは、IX 5,5-6（Rājasūya章の最後）として収録されているが、テキストを編集したvan Gelderはこれは正しい位置ではないと述べる：cf. van Gelder, Jeanette: *The Mānava Śrautasūtra belonging to the Maitrāyaṇī Saṁhitā* (1961) & (1963), IX 5,5,1の訳に対するn.1と、テキストの序文p.5. さらに、Kashikar, C. G.: *Vārāha Śrautasūtra. Belonging to the Maitrāyaṇī recension of Kṛṣṇa Yajurveda* (1988), p. LIXを参照。

3）「［この祭式は］、家畜を望む者が、R.［星宿］あるいはC.［星宿］の日に行う」の意味と、「家畜を望む場合には［特に］、R.［星宿］あるいはC.［星宿］の日に行う」の両方の意味が考えられる。MS IV 2,1(3):22,10には、*paśúkāma-*が献供を行うことが規定されている。しかしIV 2,7:29,1には、*grā́makāmaṁ yājayet*「村を望む者に［この祭式を］開催させるべきである」という規定が、:29,3f. *paśúkāmaṁ yājayet*「家畜を望む者に［この祭式を］開催させるべきである」と並んで記されている。また、家畜を望む者の星宿については、IV 2,9:31,8f. *tásmād, yát kíṃ ca paśūnā́ṃ kurvītá, tád revátyāṃ kurvīta*「それ故に、家畜のために行うことは何でも、それをRevatī［星宿］の下で行うべきである」と述べられる。

4）Nominativ Sg. m. *vijā́yamānas*は、*sá* (=Prajāpati)に一致する。*ví-jāya-*がImperfektの定動詞として現れるMS IV 2,13:36,3も参照せよ：*devā́ vái sárve sahā́ntárvanto ’bhavaṁs. té sárve sahá vyàjāyanta*「神々がみんな一緒に妊娠した。そしてみんな一緒に出産した。」*jā́ya-te*は普通「生まれる」を意味する

fientivのMediumであり、transitivの「子供を作る/生む」はAktiv *jána*$^{-ti}$もしくはKausativ *janáya*$^{-ti}$であるが（Gotō, Toshifumi: *Die "I. Präsensklasse" im Vedischen* (1987), 145f.）、*ví-jāya*$^{-te}$は「出産する」を意味する特殊な用法を示す。Gotō: "“Purūravas und Urvaśī” aus dem Vādhūla-Anvākhyāna", *Anusantatyai* (2004), 85 n.19; 後藤敏文:「新資料Vādhūla-Anvākhyānaの伝える「PurūravasとUrvaśī」物語」,『インド哲学佛教思想論集』(2004), 858, 867 n.43を参照せよ。可能性として、「[出産して]、胎児から離れた、別の状態になる」という表現がもとにあると考えられる。

Instrumental *gárbheṇa*は、*vijā́yamānas*に関っているとも、*atāmyat*に関っているとも考えられるが、動詞*tam*^{i}はここでは「（分娩でいきむ際に）息をつめる」（その結果、顔色が青黒くなる）を意味することから、「胎児によって」の関りは必ずしも適切でない。そこで、*ví-jāya*$^{-te}$の本来の意味「胎児から離れた、別の状態になる」を補うものと考えた。*ví*がInstr.と共に用いられることについては、Delbrück, *Altindische Syntax* (1888), 131; Amano (2009), Index s. v. Instrumentalを参照。

5）両方のEditionで、*manuṣé*となっている。von Schroederは、MS IV巻のCorrecturenで*mánuṣe*と直す(Mittwedeを参照)。*mánuṣe*は、*mánuṣ-* m. のDativ Singular, あるいは*mánuṣa-* m. のLokativ Sg.の可能性があるが、両方の語とも「人間」を意味し、この文では意味をなさない。*mānuṣá-*は「人間の、人間に関する、人間のための」を意味する形容詞で、例えば*dáiva-* (MS III 6,1:60,4f.) / *divyá-* (MS I 4,7(4):55,12f.)「神々に属する」、*āsurá-*, *sádeva-*「Asura達に属する」、「神々を伴った」(TS II 5,11,1), *saumyá-*, *rākṣasá-*「Somaのための」、「Rakṣas達のための」(TS II 5,3,5) などの語と対になって現れる。用例の中に、名詞を伴わず、n. Sg.で現れるものがあり、それは「人間に関する［行為］」を意味している（MS III 6,6:67,4 = III 8,7: 103,12; TS II 5,3,5; II 5,11,1）。そのことから、この箇所において、*mānuṣé*「人々に関する/人々のための［行為］において」であると解釈した。

6） 両方のEditionで*vavṛ́*となっている。von SchroederのHs. Mではアクセントなし（ただしすぐ下では*vavṛ́*）。von Schroederがn.4で述べるように、おそらく*vavrí-*の伝承によってくずれた形であると考えられる。*vavrí-*はMSに一例だけ現れるが、伝承にはやはり問題がある（下を見よ）。

*vavrí-*の語はRVから用例があり、辞書や文法書（Böhtlingk, Otto / Roth, Rudolph, *Sanskrit-Wörterbuch* (*PW*; 1852-1875), s. v.; Grassmann, Hermann G.: *Wörterbuch zum Rig-Veda* (1873), s. v.; Mayrhofer, Manfred: *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen* (1992, 1996), s. v.; Wackernagel, Jacob /

Debrunner, Albert: *Altindische Grammatik* (*AiG*), II 2 (1954), 85, 300）で、すべて男性名詞とされ、「隠れ場所」等の意味があてられている。おそらく *var*「覆う」からの派生で、重複語幹に Suffix *-i-* をつけた語形であると考えられるが、この語形成は *AiG* II 2, 300 が述べるように Substantiv を形成することもあるが、同書の 291ff. で多くの例が挙げられているように、行為者名詞、つまり「...する」の意味の形容詞であることも多く、むしろこの意味がもとであると考えられる。すなわち *vavrí-*「隠れた」（そこから「隠れ場所」）の意味は十分設定しうる。

vavrí- の MS における例、IV 2,3:24,13 では、*eṣá vavrís* と、m. Sg. で現れるが、おそらくは *vavrí-* は *eṣá*（= Agni）を述語的に形容する形容詞であると考えられる : IV 2,3:24,12ff. *asyā́ vā́ eṣá vavrír* (Ed. Sātavalekar; Ed. von Schroeder もそのように直す ; Hs. M *vavṛ́r*; B *vavror*, H Bb *vavróṃr*) *útsṛṣṭaś carati lomaśó lomaśā́yās. tásmād eṣā́* (Ed. Sātavalekar; Ed. von Schroeder *erṣā́*; vgl. Mittwede) *śā́śvasaty ety* (Ed. von Schroeder がそのように直す ; Hs. H Bb *śā́śvasaty éty*; B *śāśvasaty ety*; M *śā́śvasatt ety*; Ed. Sātavalekar *śā́śvásaty éty*; vgl. Mittwede). *agnír hy àsyā́ āsyàṁ, vā́taḥ prāṇás*「例の［神格］（Agni）は、この［大地］に隠れていて、解放されれば動き出す、［つまり］、草木に覆われていて、草木に覆われた［大地］から［解放されて］。それ故に、このもの（大地）は、息遣いをし続けている。火がこの［大地］の喉であり、空気の動きが呼吸であるから。」文脈は儀礼が行われる祭場の説明で、草の束で作った柱のところに水をかけると述べられる。その理由として、大地に隠された火が言及されているものと考えられる。それが、「草で覆われている」あるいは「大地の喉」と説明され、一方で「解放されて動く」と述べられていると考えられる。

IV 2,1 で *ánnaṁ* +*vavrí*「隠れた食べ物」と言われるのは何か、ということであるが、考え得る解釈を挙げる。一つは「乳」であり、雌牛の体内に隠れたもの、というイメージは RV に現れている : RV IX 71,5 *gór apīcyàm*「雌牛の［中に］隠れたもの」。あるいは「［誰かによって］隠された食糧」を、例えば略奪して奪うこと、あるいは「探し出すことが困難な作物など」が考えられる。MS IV 2,13:36,8ff. に、この神話の焼き直しが語られるが、*vavrí-* に該当する語は現れない。

7） MŚS IX 5,5,5 に規定として組み込まれている : *bhinnena sravatā na avanenijīta, na pibed ayaspātreṇety eke*「ある者達は『割れた、漏れている［器］で手を洗ってはいけない、鉄の器で飲んではいけない』と［言う］。」*srávant-*「漏っている［器］」（Gotō (1987), 338; *PW* s. v. を参照）に対して、分かりやすく *bhinna-*「割

れた」を補っている。

8）:22,3ff.の文では、*yá eváṁ véda*に対する主文は、*ubháye ha vā́ enaṃ devamanuṣyā́ abhíkāmayante*と*vā́rukā enam ā́rtvijye bhavanti*の二つからなる。*yá eváṁ véda*に対する主文が、*ha vái*あるいは*ha*を含むことは、しばしばある（Amano, Index s. v. Indikativ Präsens, 3.6.1; 上の:22,1f.も見よ）。二つの文が続くことを示すため、一つ目の文の定動詞にアクセントがあることが望まれる（規則ではない: Amano, 34ff.を参照）が、ここでは*abhí-kāmayante*は動詞のアクセントを示さない。同様に、:22,5f. *śuśrūṣante*, IV 2,1(4):22,17f.と20f. *jahāti*. それに対して、アクセントを示す例は、IV 2,1(4):22,15f. *karóti*. また、*sá yás ... véda*の関係文が前に来る場合でも、IV 2,1(1):21,4 ... *ha bhávati*, 同様に:21,5, :21,7f., :21,9f.

9）両方のEditionで、*ā́hvayedrásanty*となっているが、上にImpf. *atrasat*が現れていることから、ここでは*trásanti*が適切であろう。Ed. von Schroeder, 該当箇所のn.5; Mittwede, 155を参照。

10）Cf. IV 2,14:38,13 *yā́ saṁśṛṅgī́ sā́ goṣṭhás*「角が向い合せに生えている［雌牛］、それは牛小屋である。」*AiG* II 1 (1905), 75; II 2, 377を参照。

11）文脈からも、*úd ... dī́pyate*「上へと燃え上がる」からも、この文の主語はAgni「火」である。*riṣyati*は「損傷する」を意味することから、また、「上へと燃え上がる」との対比と考えると、*ní ... riṣyati*は火が小さくなる様を表現していると考えられる。

12）写本は*svapyā́d*の読みを示すにもかかわらず、von Schroeder, Sātavalekarとも、+*satyā́d*と直している。*svapyā́t*はWurzel-Präsens *svápiti*のOptativ: Mittwedeに挙げられた文献、さらにGotō (1987), 344を参照。

（文学研究科非常勤講師）

RESÜMEE

Über Maitrāyaṇī Saṁhitā IV 2,1 (Anfang des Gonāmika-Kapitels)

Kyoko Amano

Die Maitrāyaṇī Saṁhitā (MS), die um 900 v. Chr. verfasst wurde, enthält die sogenannte Brāhmaṇa-Prosa, die aus Erklärungen bzw. Diskussionen über Ritualpraxis, diese unterstützenden Theorien und alten Mythen besteht. MS IV 2 behandelt das Gonāmika "[Ritual] mit den Namen der Kuhe" genannte Ritual, das sonst kaum in der Ritualliteratur beschrieben wird: nur die MS und zwei zu ihr gehörige kommentarartige Texte, das Mānava-Śrautasūtra und das Vārāha-Pariśiṣṭa, behandeln dieses Ritual. Es gehört nicht zum Śrauta-Ritual, das von einem qualifizierten Opferherrn und meistens mit mehreren eingeladenen Priestern veranstaltet wird, und ist wohl deshalb nicht sehr beachtet; desto seltsamer ist es, dass dieses Ritual in der MS vorgeschrieben wird.

In meinem Aufsatz wird MS IV 2,1, der Anfang des Gonāmika-Kapitels, übersetzt und erörtert, und zwar mit einem Kommentar zu inhaltlichen und sprachlichen Besonderheiten.

キーワード：Maitrāyaṇī Saṁhitā, Gonāmika, devatrā́, mānuṣá-, vavrí-